明海大学不動産学部
不動産の不思議
学生たちの視点と発見
第371回

照明の重要性

既存住宅にも安心感与える

土屋 萌笑
不動産学部3年

【学生の目】

緑道を設けている住宅街は多い。水場もあったりして、子供たちの遊び場になっている。それはとてもいいのだが、どうにも緑道に調和するような住宅が少ないのだ。そんな中で、写真の住宅は緑道と調和しているように思えた数少ない建物である。建物そのものに際立った特徴があるわけではないが、周辺の建物とは明らかに違った印象を受けた。

その理由は、照明にある。たまたま通りかかったのが夜だったので目についたのだ。ぼうっとした優しい光が建物と路面、そして植栽を照らしている。植栽の根元から中心部の幹に向けてライトが当てられ、植栽の質感を際立たせたり、建物の壁に影を映し出したりしている。照明というよりライトアップという言葉を使うほうが正しいだろうか。建物全体も下からライトアップされ、存在感が演出されている。

また、緑道から見ると、建物側の植栽と緑道の植栽が見事にマッチしている。奥に続いていく道のようなエントランスもよい。広いスペースがあるわけではないが、微妙な屈曲や高低差によって視覚的な奥行きをもたらしている。このエントランスもまた優しい照明で照らされている。光の色も重要で暖色系のライトが温かい印象をつくっている。アパートでありながら照明で演出された空間は、軽井沢の別荘やリゾートのホテルをほうふつとさせた。

照明にこだわっている集合住宅は少ないように感じる。今回の住宅を目にするまで深く考えたことがなかったが、住宅の安心感や温かさ、存在感の演出をする際に照明という手段があることを学んだ。照明とは、ただ暗い場所を明るくするためだけのものではないのだ。

地元の田舎から人の多い街に引っ越してきて思ったのだが、住宅街は人口の多さにかかわらず、どこに行っても案外暗い。繁華街に出れば夜でも明るいが、住宅街の明かりといえば冷たい光を放つ街灯ばかりである。このポツンポツンと、等間隔に並ぶ街灯が私は苦手で、夜道を歩くときに不安をあおられる原因の一つになっている。

寂しい住宅街を抜けた先に待つ我が家が、優しい光に包まれた安心感のある家だったならどれだけ素晴らしいだろうか。安心感のある住宅街だったら更によいだろう。こういう住宅は多ければ多いほどよい。植栽や照明は、既存の住宅にも付け加えることができるだろう。これからこういった住宅が増えることを期待したい。

照明で安心感や温かさ、存在感を演出

【教員のコメント】

ランドスケープの点で日本の住宅と住宅街は立ち遅れている。昼は植栽、夜は照明が主役となるが、いずれも初期および維持の費用がかかることから脇役にとどまってきた。既存ストックの価値を高める演出の主役となる予感を若い感性が捉えた。